

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 570

〈世界〉は出鱈目である！ -映画『メルキアデス・エストラダの3度の埋葬』

人間が生まれてきたこと自体が出鱈目である！ そう思うことが時にある。いや、生命が生まれてきたことがそもそも出鱈目であり、その出鱈目が出鱈目を次々と喚び込んで、人間という出鱈目に行きついたのかもしれない。ところが人間は自分たちが出鱈目な存在であることに気づくことによって、出鱈目ではない方向へと人間を教化していくことになった。出鱈目であるからこそ、出鱈目ではない世界へ向かうことが人間のあるべき姿だと思い込まざるをえなくなったのだ。そして出鱈目を封印することが、人間の進歩の証とされた。しかしながら、出鱈目な人間に出鱈目の封印を強制することは、「人間であろうとするためには、人間であってはならない」という根本的な無理を生じさせるものであったし、またそのことが本当に人間にとっての進歩であるか、そして幸せであるか、という根本的な疑義をも噴出させた。

遺体と共に主人公と加害者がその埋葬場所を求めて旅をする映画『メルキアデス・エストラダの3度の埋葬』は、人間のそんな出鱈目な旅を描写している。ここで「出鱈目」とは、荒唐無稽ということではない。出鱈目であることを忌避して自分を幸せから遠ざけていくのではなく、出鱈目を楽しんで自分を幸せにしていく術がこの映画には見出されるのだ。ジャーナリストの藤原章生が06. 3. 27付毎日でこの映画に触れて、「ラテン世界のいま」と題するエッセーの中で次のように書いていることとも、このことはかかわってくるだろう。

《過去4年、メキシコ市を拠点にラテンアメリカで取材した。とくに南米のコロンビアを10回以上訪れた。ペルー、チリ、キューバ各5回、ブラジル、ハイチ3回などと比べ、ずい分とコロンビアに通った。一人で30数カ国を担当する。的を絞らなければ一国の国民性やラテン気質を知ることにはできないと思ったからだ。

コロンビアでは農村や地方都市を回った。楽天主が多いカリブ沿岸、寡黙な先住民の目立つ南部、黒人が多い太平洋岸というように、地域によって民族はさまざま。一言で「コロンビア人とは」と言い切れない。強いて共通点を挙げれば、貧困や暴力や失職にさらされながらも、人々はリラックスして自分本位に生きているということだろうか。

所得や日々の意識などを基に国民の幸福度を自分率で表した「幸福——ニュー・サイエンスからのレッスン」（リチャード・ラヤード著、05年）によると、コロンビア人の幸福度は中南米でも群を抜き、日本を8ポイント上回る88%を示しているという。幸福感は相対的なものだが、どこまで自分に正直になれるかという点が大きな要素を占めるように思う。

先日、メキシコ市で映画『メルキアデス・エストラダの3度の埋葬』を見た。出演女優のバネッサ・パウチェさんは「さまざまな情報や価値観にさらされている人間がどこまで自分の感覚や感情に素直になれるか。つまりは自分の人生にとって本当に大切なものは何かを、この映画は問いかけている」と語った。》

日本が若者にとって自己肯定感が持てず、幸福感が低い国であることは度々言われている。世界で経済大国二位の日本とコロンビアでは所得の面で比較にならないぐらい圧倒的な格差があるにもかかわらず、コロンビア人の幸福度が日本人のそれよりも大きく上回っているとすれば、その幸福感に経済的な問題がほとんど影響を与えていないのが見てとれる。「経済的に豊かであるにもかかわらず、幸福感の低い」日本と、「経済的に貧しいけれども、幸福感の高い」コロンビアといった、際立つ非対称性がそこに成り立っているといわねばならない。少なくとも「経済的に貧しいが故に幸福に感じられない」、逆に、「経済的に豊かになったから幸福感が増した」という図式は成り立たなくなっている。

経済的に豊かになったのに幸福感がないといういいかたは、経済的に豊かになったために幸福感がなくなったといういいかたに換えられるかもしれない。同様に、経済的に貧しいからこそ幸福に感じられる、と言いつ換えられるかもしれない。つまり、こういうことだ。経済的貧困は飢えを切り抜けるために、人々の間に家族や周囲の協力を生み出す。その人間同士の工夫にあふれた濃密な協力関係が幸福感を高める。逆に、経済的に満たされることは人間同士の濃密な協力関係を遠ざけて、各人の孤独感を深め、幸福感を低下させようとする。もしそうだとするなら、経済的貧困から脱していくほど幸福感も低下するが、しかしながら、人間は幸福になろうとして経済的貧困から必死に脱出しようとするのではないか。いずれにしろ、コロンビアと日本を比較しただけでも、幸福感に経済的指標がほとんど影響していないことは明白であり、コロンビア人の幸福度の高さには貧困故の幸福感といった以上の、なにかが加わっているのが感じられる。

その「なにか」はラテンアメリカ特有の、《人々はリラックスして自分本位に生きて》おり、《コロンビア人の幸福度は中南米でも群を抜》いているとすれば、「自分本位」の度合いの大きさにかかわってくるのではないか。では、「自分本位に生きる」ということはどういうことなのか。《どこまで自分に正直になれるかという点が大きな要素を占める》ことだ、と言われている。自分に正直であることが一番で、他人に同調することは二の次だ、ということだ。他人に同調するために自分を偽って生きるところに、幸福感が生まれる筈はない。一言でいえば、他人の眼を気にするな、ということだ。他人を気にするより、自分を気にしろ。つまり、自分を納得させながら、生きればいいじゃないか。エッセーでは、映画の中盤でのある場面が取り上げられる。

《別の国境警備隊員の男が、メキシコへと山を越える主人公に狙いを定めながらも引き金を引けない。「できない」と天を仰ぐと、ワシが飛んでいる。映画の前半で自分そのものを見失いかけている米国人の味気ないけん怠感が描かれているため、空を舞うワシ

はあるがままだに生きる者の象徴のように思える。空を見上げていると携帯電話が鳴り、その男は我に返る。》

《メキシコへと山を越える主人公》が、《空を舞うワシ》のように、「自分本位」の姿を映しだしているが故に、《自分そのものを見失いかけている米国人》の国境警備隊員の男は主人公をどうしても銃で撃つことができない、というようにここでは捉えられている。自分を見失った存在が「自分本位」に生きる存在を撃つことがどうしてできるだろう。「自分本位」に自由に生きる精神が国境を越え、山を越え、あらゆる制約と障害の壁を乗り越えていく姿がここに描写されていることをみようとする。《自分そのものを見失いかけている》男の眼に一瞬、「自分本位」に行動する主人公が標的をはみだして映しだされたとしても、がんじがらめの携帯電話によっていつでも《自分そのものを見失いかけている》現実へと引き戻されるのだ。

いうまでもなく「自分本位」は自己中ではない。自己中は周囲から自分を閉ざしているが、「自分本位」は周囲にむかって開かれている。「自分本位」は拡大する自分であるが、自己中は縮小する自分にほかならない。自分が自分にむかって開かれていく「自分本位」は遠くのまなざしを持つとするが、自分が自分にむかって閉じられていく自己中は身の回りのまなざししか持たない。「自分本位」は自己肯定感の裏返しであり、自己中は自己喪失感の裏返しにすぎない。「自分本位」の大きさは出鱈目の大きさである。

「自分本位」に生きているコロンビア人は貧困や暴力や失職などの社会の出鱈目を楽しむことのできる作法を心得ており、「自分本位」に生きられない者は社会の出鱈目に包囲されて、自分自身を出鱈目へと追い詰めていくのだ。「自分本位」であることの基準は自分を出鱈目へと解放していくことができるか、自分を出鱈目へと閉じ込めていくか、にあると思われる。

『メルキアデス・エストラダの3度の埋葬』は、アメリカ映画の性格派スター、トミー・リー・ジョーンズの主演、監督の作品で、05年カンヌ国際映画祭最優秀男優賞と最優秀脚本賞を受賞した。ストーリーはこうである。

米テキサス州で狩りをしている二人の男がコヨーテを撃ち殺した。獲物を取りに近づくと、そこには食い荒らされた男の死体があり、それはメキシコ人カウボーイのメルキアデス・エストラダだった。遺体安置所で変わり果てた親友の姿を呆然と眺める同僚のカウボーイ、ピート・パーキンズ（トミー・リー・ジョーンズ）が、初めてメルキアデスと出会ったのはピートが働く牧場だった。メキシコから不法入国したメルキアデスは、ピートの計らいでカウボーイとして働き出す。純朴で優しい彼は心の底からピートを信頼し、二人は年齢を超えた友情で結ばれる。ある日、メルキアデスはピートに大事にしている一枚の写真を見せる。故郷メキシコに残してきた彼の家族の写真であり、そこには5年間会っていないきれいな妻とかわいい娘たちが写っていた。「約束してほしい。もし俺が死んだら、故郷ヒメネスに埋めてくれ」、そう彼は言い、ピートと約束したのだった。

ピートはこの殺人事件を闇に葬ろうとする地元警察官に憤りを感じ、自ら必死になって犯人を捜したそうとする。保安官ベルモントに「メルキアデスの遺体を俺にくれ」とピートは頼むが、共同墓地に埋葬され、落ち込む。家にこもるピートに友人が尋ねてきて、薬莢を差し出し、「遺体の近くに薬莢が落ちていた。なにか意味があるのかもしれない」と言う。ある夕方、レイチェルが訪ねてくる。夫との生活に満たされない彼女はピートの密かな遊び相手であり、他に保安官のベルモントとも逢い引きを楽しんでいた。ダイナーで、国境警備隊長ゴメスとベルモントがメルキアデスを殺したのは新任警備隊員のマイクである、と話していたと言う。マイク・ノートンは美しい妻のルー・アンとテキサスに引っ越してきたばかりで、妻は知り合いがいない田舎町で空虚な毎日を過ごしていたが、近所のダイナーでウェイトレスのレイチェルと知り合って、彼女とおしゃべりするのが日課になっていた。

マイクは国境警備隊員として不法入国の絶えない国境を守るために、不法入国者であれば、女だろうと容赦なく拳で殴るような男だった。いつものように見回りをしていたマイクがポルノ雑誌を片手にジープから降りたとき、突如銃声が鳴り響き、驚いて慌てて撃ち返してしまった。おそろおそろ近づくと、そこには撃たれた男が血を流して倒れていた。ヤギを守るためコヨーテを射殺したメルキアデスだった。途方に暮れたマイクは丘に死体を埋め、逃げ出すが、死体はコヨーテに食い荒らされてハンターに発見されたのだ。ピートはベルモントにマイクを逮捕するよう詰め寄るが、全く相手にされなかったために、夜になるのを待って一人でマイクの家に入り込む。銃で妻のルー・アンを脅して椅子に縛り付け、無理矢理マイクを拉致する。共同墓地に埋葬された遺体を掘り返させ、メルキアデスの服をマイクに着せて、メルキアデスと約束した故郷ヒメネスに埋めるために、遺体をマイクに運ばせようとする。

かくしてピートとマイク、遺体の三人がヒメネスをめざして、メキシコに不法入国するという奇妙な旅が始まる。翌朝、マイクの誘拐を知った警察と国境警備隊は、大規模な捜査隊を組んでピートら一行の行く手を阻もうとする。一行が荒野を進んで行くと、廃家で大きく鳴り響くスペイン語のラジオを聴いている盲目の老人に出会う。食事を振る舞った後で自分の死期を悟っている老人はピートに「わしを撃ってくれ」と頼むが、ピートは断る。遺体を運ぶ旅をしている彼に、新たな遺体を生み出す理由は全くないからだ。そのことを感じ取った老人はピートに、「あんたらはいい人間だ」と言う。

メキシコに向かうなかでマイクは、「俺に罪はない、事故だったんだ。殺そうとしたんじゃない」と、事件のことを口にするが、ピートは耳を貸そうとしない。砂漠に脚を取られてピートの馬が転倒したとき、マイクは熱砂の中を裸足で必死に逃げ出し、やっとの思いで岩穴に逃げ込むが、ガラガラ蛇に噛まれて失神する。彼を助けるためにピートはメキシコ人の一団に、薬草に強い女マリアナを紹介してもらう。国境を隔てる川の中を、ピートは悪態をついて暴れるマイクを引きずっていく。執拗に追ってくる警備隊から隠れて国境を越え、一行は無事にマリアナの家に入り着く。彼女は以前に不法入国

を試みたとき、マイクに容赦なく殴られた女だった。そのことを知りながらも彼女は治療を施し、マイクが長い昏睡から目が覚めたとき、彼の脚に怒りを込めて熱いコーヒーをかける。翌朝、元気になったマイクはメキシコの女性たちと一緒にになって収穫されたトウモロコシを剥く。

時間が経過するにつれてメルキアデスの遺体もだんだん腐っていき、彼の顔をピートがふいてやったり、遺体にたかる蟻を撃退すべく酒をかけて燃やしたりする。マリアナに体から蛇の毒を抜かれたマイクにも微妙な変化が訪れている。かつて妻が見ていたテレビ番組がポータブルTVで再放送されている場面で、思わず涙を流し、見知らぬメキシコ人たちに酒で慰められる。妻の知らない別人のマイクに生まれ変わりつつあったなら、他方妻もマイクの知らない妻に変わっていき、夫を家で待たずにどこかへ旅立ってしまう。いつ殺されるのかとビクビクし、隙あらば逃げることを考えていたマイクが、憎っくきピートの身を案じるようになり、そんなマイクにむかって” SON „と短い言葉の最後に付け加えるピートにも変化が訪れつつあった。なにを思ったのか、米国に残した浮気相手の亭主たちのレイチェルにメキシコから電話で結婚申し込みをし、あっさり断られるのだった。

過酷な旅の果てにようやくピートは、写真に写っていたメルキアデスの妻である筈の女性を見つけるが、彼女には別の夫がおり、メルキアデスのことを全然知らないと言う。しかも地元の住人たちは、ヒメネスという村など存在しないと言うのだ。メルキアデスという名も嘘だと判ってくる。呆然とし、途方に暮れるピートは、遺体の埋葬場所を探し求める。とある場所をメルキアデスが望んでいたヒメネスと思い定めて、ピートはそこでメルキアデスの葬儀を行う。ピートは彼との約束を果たしたのである。マイクを釈放すると、ひとり馬に乗って去って行く。

映画パンフには、《テキサスとメキシコを隔てる川、人間が作りあげた国と国を隔てる国境はただの境界線でしかなく、そこに生きる人々にとっては全く意味を成さない。境界線とは国を隔てるだけでなく、人々の中にもあり、人が差別や偏見を生み出す。本作で描かれた友情は、その境界線を拭い去ることで結ばれた本当の意味での情愛である。一対一の間人同士に生まれる友情そして愛は、境界線を越えた先に必ずある》とありきたりに説明されており、川本三郎も同パンフ所収の文章冒頭に、《久々に男っぽい映画である。／男女のあいだの恋愛よりも、男どうしの友情、信頼を描いている。》と書く。もちろん、それらの見方に収まるテーマよりも、その見方をはみだすテーマのほうがはるかに大きい。監督、主演のトミー・リー・ジョーンズが同パンフのインタビューで、ウエスタンの質問を受けて、「ウエスタンよりも大きなものが描かれている」と答えたのと同じように。

「境界線」についていうなら、この映画にはなによりも生者と死者のあいだの「境界線」が越境されているのがみられる。監督インタビュー（『キネマ旬報』06年3月下旬号）で、トミー・リー・ジョーンズは「この映画は国境についての話にしたい、ということこ

ろから始った。メキシコとテキサスの間にある国境についてだ。」と語り、脚本家のギジェルモ・アリアガとの映画づくりについてこう話す。

「一緒に映画を作りたい、とは思ったものの最初は漠然としたものだった。お互いにアメリカとメキシコの社会的なコントラストをだしたい、と考えていたところは同じだったが、具体的なものではなかった。そこから生まれる感情的なことや心理的、精神的なことを考えながら次第に国の真ん中に無理に国境線を引いて、それを暴力で脅かすことによってもたらされるものを描こう、ということになり、やがてどうせやるなら古典的な物語の形式をとりたい、ということになった。そこで出てきたのが主人公が旅をする、という形式で、彼は死者を連れて旅をする。メキシコ人というのは死との関係がおもしろく、彼らは、死者が死んでいない、というフリをするのがうまい。メキシコには年に一度ハローウィンとは違った死者の祭の日があり、その日は骸骨が主役で、キャンディに骸骨がついていたり、骸骨姿でロデオをしたりする。この祭はサンアントニオでも祝うんだ」

彼は続いて、「いまの私は人口の60パーセントがヒスパニック系のテキサスのサンアントニオに住んでいるが、ここはメキシコとのバイカルチャー社会。誰でも英語とスペイン語の両方をしゃべる。二つの文化で生きているという意味では、私はピート・パーキンスと同じだし、私の妻の血の半分はヒスパニックだ」と語り、異なる「二つの文化」の時間を生きるなかで、「メキシコとテキサスの間にある国境について」の話を発端としているだけで、映画そのものがどこへ行こうとしているのか、については説明しているわけではない。生者と死者の境界線については、なによりも「メルキアデス・エストラーダの3度」という映画のタイトルそのものが、なにかを暗示しているように思える。

映画パンフの中の文章「三度の埋葬では終わらないボーダーの精神性」で、翻訳家の江口研一は《一度目の埋葬は自分を射殺した警備隊員に山へ埋められる時。二度目はコヨーテに顔半分を食われた状態で発見されても、怠慢な警察の手で無縁仏として市営墓地に埋め直される時。そして三度目は、ピートが遺体を引き取り、遺言通り、彼の故郷と”思われる”村で埋葬される時》と列記して、その《三度の埋葬》の意味についてこう指摘する。

《メキシコを常に間近に感じて育ったというテキサス育ちのトミー・リー・ジョーンズと、メキシコ人脚本家のギジェルモ・アリアガがどこまで意識したか分からないが、その三度の埋葬は、古代アステカから受け継がれてきた、メキシコ人の死の捉え方と無関係ではないだろう。メキシコでは、人は死を三度経験するという。一度目の死は、肉体が死に朽ちる時に訪れる。殻としての肉体が機能しなくなり、意識を運ぶことができず、それまで生きてきた空間が意味を成さなくなるということ。二度目の死は、最初の死を体験した肉体が地面に埋葬され、大地に返される時だ。そして三度目の死は、自分がいたことを誰も思い出さなくなる時にやってくる。人の記憶に残り、その記憶の中で生か

されている間は、ある意味、まだ生きているということだろうか。》

人にとっての最初の死は肉体の死として訪れ、次に死体は大地に埋葬されて返っていき、最後に生き残っている人の記憶から消えていくという本当の死がやってくる。つまり、そのような死後の経過を辿って、生存している人間の世界から別れていくということだ。肉体が死んでも記憶されている間はまだ死んではおらず、その記憶から跡形もなく消え去ってしまったとき、人は本当にこの世から別れることができる。成仏ということになるのだろうか。こう考えるなら、殺されたメルキアデスはピートの中では生きつづけていたのであり、死体との旅は正確には、死体になったメルキアデスが自分の望んでいた場所に埋葬されるために、ピートと共に旅に出たということになる。ピートからすれば、メルキアデスの死体をきちんと埋葬しないことには、自分の記憶の中でも彼は生きつづけることができないということであったのかもしれない。江口はメキシコでの死（者）の文化について、更に触れている。

《メキシコには死者の日という祭がある。キリスト教の儀式に先住民インディヘナの伝統を編み込んだもので、墓前に家族が集まり、死者の霊を出迎えて再び送り出すという意味では日本のお盆に近いが、街や墓を派手な装飾で飾り、楽隊を呼んで陽気な音楽を奏で、酒を酌み交わすと聞けば面食らう人もいるかもしれない。

だが死が身近なメキシコでは、霊と戯れたり、死神を笑い飛ばしたりするのも、常に死／死者への尊敬の念があるからで、同時に、厳しい環境で生きてきた民が、死神を追い払う方法だったのかもしれない。

11月1日の諸聖人の祝日と2日に催される祭のために、人々は何週間も前から祭壇の準備を始め、独特の死者のパンや塩や水（ここでも3だ）、故人が好んだ嗜好品などを供え、死者を迎える。1日は子供の日だが、あくまで”亡くなった”子供の日のこと。だが街で会ったお父さんは、子供にケーキを買って帰り、家で食べて祝うのだと話していた。また大人の日の日2日はみんなで墓地へ出かけ、ピクニックを広げて祝う予定だと言った。朝に死者の霊が帰るまで宴は続く。

インディヘナが多いミチョアカン州では伝統的な儀式が広く行われ、街中が骸骨のモチーフで溢れる二日間は観光客もどっと押し寄せるが、急速な都市化のおかげで、首都ではアメリカのハロウィンの飾りや仮装も多く、若者たちはドラキュラやメイド服でクラブに集まっていた。》

しかし、急速な都市化やアメリカ資本の流入等でメキシコにおける死（者）の文化や伝統が揺らいでいることも伝えている。《ピートが国境を越え、メルキアデスの故郷のチワワ州でも、貧しい地域からアメリカ、またはフリートレード条約後に建設されたマキラドーラスと呼ばれるアメリカ資本の工場での仕事を求めて北上してきた人が多いため、死者の日の儀式も行われるが、エルパソに繋がるボーダー・タウンのシウダード・フアレスなどでは急激な人口増加から劣悪な環境で暮らす人も多く、近郊アナプラで数年前から女性連続殺人事件が起きたり、アイデンティティ喪失まで叫ばれ、国境のフェ

ンス越しに人々が集う抗議運動もニュースで取り上げられている。》

そうした社会変化に伴うメキシコ文化、伝統の変容のなかで、この映画が作られていることの意味に視線を注いで言う。《そうした問題を子供の頃から見てきたジョーンズは、流入するメキシコや中南米移民を取り締まる現実と、既に土地に根づいているメキシコの精神性を、すぐに忘れられる社会問題でなく、ずっと心に訴える詩的な映像で描こうとしたのだろう。だからこそメキシコのモレリア映画祭での拍手が何より嬉しかったようだ。》

不法移民であろうとなかろうと、アメリカで死んだメキシコ人はアメリカで埋葬されるべきではなく、祖国のメキシコで埋葬されるべきであろう。そしてメルキアデスのように事故で殺された場合であれば、加害者もその埋葬に加わらなくてはならないという考えは、別に不思議でもなんでもなく、メキシコ側からすれば当然の考えであることが、以上の記述から伝わってくる。だがメキシコ流の考えを取り入れなければ、加害者を強制的に拉致して彼に遺体をメキシコまで運ばせ、埋葬を手伝わせようとするピートの行動は乱暴で、理不尽にみえるかもしれない。国境の川を越えたこちらにやってきたものの遺体は、再び国境の川を越えてあちらに引き渡すのはあまりにも当然のことではないのか。しかし、映画ではメルキアデスが望んだ埋葬地はメキシコ側にもなかった。では、彼はどこに埋葬されるべきなのか。つまり、ピートは彼の埋葬場所はどこがふさわしいのか、の決断を迫られていたのだ。

「越境するメキシコ人とアメリカ」との関係について、中央大教授国本伊代が映画パンフで簡潔に説明している。

《小高い丘がうねるように続く、サボテンと灌木がまばらに生えた不毛の国境地帯。土埃が舞い上がる起伏の激しい土道をジープでパトロールする国境警備隊。「不法越境者発見」の無線連絡で現場に急行した国境警備隊員たちがメキシコ人を捕らえる手荒さ。女性だって抵抗すれば顔面をいやというほど殴りつけられる。アメリカとメキシコの国境地帯で日常的にみられるであろう光景が、この映画の冒頭に出てくる。豊かなアメリカへ不法入国しようとする貧しいメキシコ人の群れとそれを阻止しようとするアメリカの国境警備隊との攻防戦の歴史は古い。

この映画の舞台となったテキサス州はもともとメキシコの領土であった。開拓移住者として入植したアングロサクソン系アメリカ人が1836年にメキシコから独立を勝ち取り、10年間の共和国時代を経て1846年にアメリカ合衆国に併合されたが、この併合に反対したメキシコはアメリカに挑戦状を叩きつけて戦争に突入し、2年にわたる熾烈な戦いの末に敗れた。その結果、メキシコはテキサスだけでなくニューメキシコ州からカリフォルニア州にいたる広大な領土をアメリカに割譲しなければならなかった。こうして現在のアメリカとメキシコの国境線は確定されたが、その後もこの国境地帯に昔から住んでいたアパッチ族やメキシコ人は、あまり国境線を意識せずに暮らし続けた。しかし西部開拓前線が進展し、アングロサクソン系社会が豊かになると、国境線は重要

な意味をもつようになった。越境してくる南の貧しいメキシコ人は、アメリカにとって両刃の剣のようなものとなったからだ。労働力として安く利用できるというメリットと、アングロサクソン系アメリカ社会に適応しないラテン系移民が住み着くことによって生じる社会的・文化的摩擦というデメリットである。人種偏見も根強く存在した。しかし今やアフリカ系人口を追い抜いてアメリカ最大の非アングロサクソン系集団となりつつあるヒスパニック系住民の中核を占めるメキシコ系住民はアメリカ社会の構成員として認識され、大統領選挙においても無視できない存在となっている。もっとも正規移民の枠外で毎年300万人以上ものメキシコ人がアメリカに不法入国するという現状は、アメリカが抱える深刻な問題のひとつでもある。

メキシコからの不法移民は、3000キロ以上におよぶ国境線のどこからでも自由に越境するわけではない。リオグランデ川を国境線とするテキサス州への潜入ルートが知られているが、物理的条件から不法入国者が集中しているのはアリゾナ州とカリフォルニア州へ潜入するルートである。ここにはアメリカがつくった高さ3メートルを越す鉄の塀が延々と続いており、潜入拠点となっているところでは、越境を試みるメキシコ人たちが塀によじ登ってアメリカ側の国境警備隊の動きを見守る姿がみられるほど、彼らは大胆である。出稼ぎを目指すメキシコ人は不法移民を手引きする専門の案内人によってグループでアメリカに潜入し、しかるべき農場などに雇用されるのが普通である。案内人は、メキシコでは「人を食いものにする人」を意味するコヨーテ（北米西部の草原地帯に生息するオオカミ）とか、家禽商人や養鶏家の意味から転じて「メキシコからアメリカへの密入国請負業者」を指すポリェーロなどと呼ばれている。不法移民は若鶏を意味するポーリョと呼ばれる。コヨーテたちが稼ぐ手数料は、この映画に出てくるように国境に近いところまで案内する場合一人1000ドルほどで、シカゴなど遠隔地までだとその倍ほどになる。映画の主人公ピートのような逆越境者は例外で、彼らはだいたいアメリカからの逃亡者だ。

メキシコからアメリカへ不法に入国する年間300万人という数字は、合法的移民の約20倍にあたる。そのうちの95%は男性で、その大半は20代と30代の働き盛りの男たちである。これほどの数の不法移民が国境の北を目指すのは、アメリカでの出稼ぎが魅力的であるからだ。アメリカで稼げる最も安い時給6～8ドルでも、メキシコの最低賃金（日給）の2倍近いことを考えると、失業者でなくてもアメリカへ潜入したくなるであろう。コヨーテに1000ドル払っても、また国境警備隊に捕まって強制送還されても、何度でも不法越境を繰り返す価値があるというものだ。こうしてアメリカは国境の鉄塀を高くし、太平洋岸では海の中にまで塀を延長し、多くの国境警備隊員を配置しつづけている。しかも厳しく取り締まろうとすればするほど、メキシコ側の潜入の手口はますます巧妙になる。このせめぎあいの中で人権侵害問題が発生し、犯罪が多発する。アメリカ政府にとっても、メキシコ政府にとっても、深刻で悩ましい問題である。

アメリカに定住する約2000万のメキシコ国籍を保持するメキシコ人とメキシコの

観光収入にも匹敵する額を送金するアメリカへの出稼ぎ移民の存在は、メキシコ政府にとって大きな意味をもつ。政府は医療・法律・教育などで移民が直面する問題を解決するためにさまざまな支援策を講ずるだけでなく、人権侵害問題の絡んだ事件では外交ルートを通じてアメリカ政府に抗議し、自国民の保護にも積極的に乗り出す。さらに家族の絆の強いメキシコ系移民社会は故郷ともネットワークでつながっており、多くのメキシコ人が国境を自由に行き来し、ラテン文化をアメリカに持ち込んでいる。アングロサクソン系文化とラテン系文化がせめぎ合うアメリカで、彼らはたくましく生きているのだ。

このようにアメリカとメキシコの国境地帯は、アングロサクソン系の豊かな社会とラテン系の貧しい社会という対照的なふたつの世界を分ける境界線である。国境の町が向かい合うところでは、清潔で秩序あるアメリカの都会と騒々しく汚れきった無秩序のメキシコの都会が国境線を挟んで対峙している。もっとも国境地帯の大部分は、この映画の舞台のような不毛地帯で、無理に越境すれば命を落しかねない険しい自然環境だ。映画では馬が深い谷間に滑落する場面が出てくるが、越境する不法移民の命を奪うのも崖や川や砂漠の厳しい自然であり、この地域に生息するガラガラヘビやサソリなどである。》

以上の解説全文から、いくつかのことがみえてくる。それは、メキシコ人を「不法越境者」として厳しく取り締まろうとするアングロサクソン系アメリカ人の祖先自体が、「不法越境者」と変わらぬ開拓移住者としてアメリカに入植してきている歴史を持っていることである。「不法越境者」である彼らが国境をつくりだして、元の居住者である「不法越境者」に困らされている歴史の皮肉に直面しているのだ。映画のタイトルの「3度の埋葬」のもつ意味も鮮明さを帯びてくる。メルキアデスに代表されるメキシコ人の「不法越境者」は、アメリカ人の国境警備隊員に殺され、「コヨーテ」という存在に殺され、故郷のメキシコでも殺され、故に「埋葬」は少なくとも三度行われなくてはならないというメッセージが響き渡っている。「不法越境者」としてメキシコからアメリカに入国していくとき、彼がいくら一時的な出稼ぎでお金を貯めてメキシコに帰る目論見であったとしても、もはや彼を受け入れてくれる、彼の望むような故郷はどこにも存在しなくなっているという事実と直面しなければならなかった。

同僚のピートと加害者のマイクが遺体を運ぶ旅とは、「不法越境者」の遺体を埋葬する場所は現実世界のどこにもありえないということの確認の旅にほかならなかった。この映画は、メルキアデスの三度目の埋葬をどのように捉えるか、にかかっているにちがいない。《男どうしの友情、信頼を描い》た《男たちの試練の旅》と捉える川本三郎は、《長い試練の旅が終わった時、いったんは存在しないと思われたヒメネスという村がピートとマイクの前に姿を現わす。いまは住む人もいなくなったその村は、豊かな緑にあふれ、隠された理想郷のように見える。試練の旅を乗り越えたピートと、旅によって人間が鍛えられていったマイクに、向こうの世界に行ったメルキアデスが最後の贈り物をしたのかもしれない》と評する。メルキアデスがピートたちの手によって埋葬された廃墟の地をヒメネスとみることができるとは、もちろん、川本の見方と異なって、

そこはヒメネスではない。

越川芳明は『すばる』（06. 4）で、《結局のところ、メルキアデスが生前に埋葬してくれと頼んでいた故郷ヒメネスは、ピートの頭の中に植え付けられた幻の「桃源郷」ではなかっただろうか。現実のヒメネスはすでになく廃墟と化していても、ピートの頭には厳然と存在する。だから、ピートはそれを手がかりにマイクと一緒にヒメネスを再現するのではないだろうか。》とみるが、いや、ヒメネスを再現などしなくともよい。「ヒメネス」は埋葬の旅のプロセスの中にすでに存在していたのであり、したがって、ピートが埋葬する場所はどこであっても、そこが「ヒメネス」なのだ。そう解せられる。川本見解のようにヒメネスが見つかったから、そこに埋葬されたということではないのだ。

宮台真司は連載映画評（『ダ・ヴィンチ』06. 5）で、《友人を殺された主人公が、犯人を捕まえて、友人の屍体と一緒に友人の故郷まで連れていき、墓を作らせて墓前で謝らせる。要は「悪いことをしたら謝れ！」というだけの映画。それが「本題」だが、「本題でない出鱈目な部分」こそがこの映画の全てだと言っている》と断じ、《この映画は凄い。凄すぎる》と評価する。「悪いことをしたら謝れ！」というのは当然の人倫だとして、その人倫を実行するために、つまり、遺体を埋葬するために、加害者の男を強制拉致したり、国境を越えたり、なによりも生者ではなく遺体中心の旅であったり、などのさまざまな逸脱が図られていくが、「本題でない出鱈目な部分」とはおそらくこの逸脱を指している筈だ。「本題」は確かに川本三郎が評するように、《男同士の友情を描いた男っぽい映画》かもしれないが、その「本題」を逸脱していく「出鱈目な部分」こそがこの映画の面白さ、眼目が最大に集約されているとあってよい。

出鱈目といえば、メルキアデスというアルキメデスをもじったような名前から始まって、この男の語った家族もヒメネスなる場所もすべて嘘っぱちであるところに極まる。旅の途中の逸脱していくさまざまな出来事も出鱈目の連続であるが、《そうした出鱈目（砕け散った瓦礫！）の背後に、荒れ果てながらも美しい不動の荒野が広がる。そして我々は思う。「そう、確かに〈世界〉はそうなっているよな」と》、と宮台は言う。〈世界〉は逸脱の中にしかないのではないか、ということだ。監督のジョーンズも脚本家のアリアガも、アメリカからメキシコへの旅が出鱈目（逸脱）になるしかないとよく見通していた。その出鱈目の中にこそ我々が真に生きていかななくてはならない〈世界〉がみえてくることが、映画で描写されていたのである。このことがわかるのは出鱈目へとたえず逸脱しようとする志向性であって、然るべくところへ収まろうとする精神ではない。《「死んだらヒメネスに埋めろ、これが妻子の写真だ」という故人の言葉を頼りに道中する主人公が、ヒメネスという町はなく、写真の女も只の「憧れの女」で、メルキアデスという名が嘘だと判っても、些かも動ぜずに道中を続ける処（観客は全く先が読めなくなる）》という宮台の指摘に、我々はやはり「そう、確かに〈世界〉はそうなっているな」と深く頷かないわけにはいかないのである。

2006年12月3日記

